

「弥生カリキュラム」の編成と検証改善サイクルの工夫

函館市立弥生小学校 学級数8 (校長 佐藤 豊)

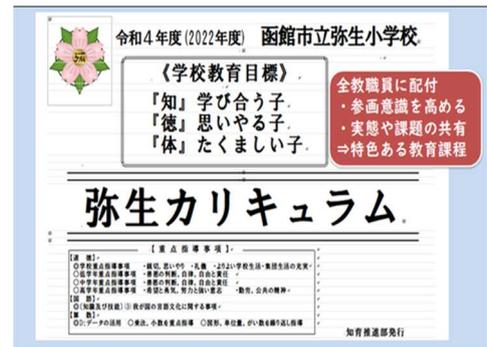
I 実践テーマの趣旨

本校では、平成28年度から「弥生カリキュラム」を作成し、カリキュラム・マネジメントの充実を図るとともに、検証改善サイクルを確立し、作成したカリキュラムの工夫改善を図りながら、学校改善を進めている。

II 実践の概要

1 カリキュラム編成について

職員一人一人の参画意識を高め、児童や学校及び地域の実態を適切に把握し、課題を明らかにして、全教職員で共有を図りながら「弥生カリキュラム」を編成した。「弥生カリキュラム」の表紙には、学校教育目標を掲げ、「育てたい子ども像」を職員全体が明確に意識できるようにしている。

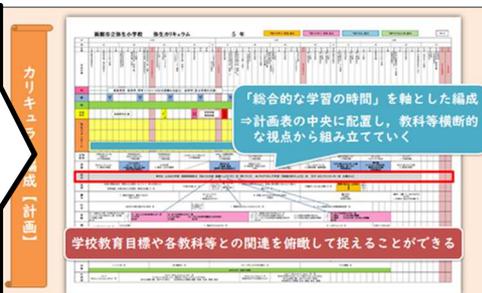


【弥生カリキュラムの表紙】

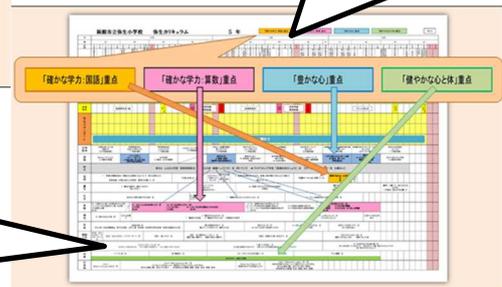
2 カリキュラム表の構成について

本校では、「総合的な学習の時間」を軸とした教育課程の編成を行っている。カリキュラム表の中央に「総合的な学習の時間」の活動を配置することによって、学校教育目標や各行事、各教科等との関連を俯瞰して捉えることができるようにしている。

「総合的な学習の時間」を軸としながら、学習の対象や領域が特定の教科等に留まらず、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習が行われるよう、教科間のつながりを意識した教育課程を編成している。



上段部には、学校教育目標に係る重点指導事項を掲載し、関連が深い単元を色分けして示すことにより、重点指導事項を意識した指導へとつながるようにしている。



下段には、ゲストティーチャーなどの情報も併記し、その単元において、人的・物的な資源の効果的な活用を図っている。

【「総合的な学習の時間」を軸とした「弥生カリキュラム」】

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 「弥生カリキュラム」を基に教科等横断的な視点を意識した指導の充実を図ることができた。
- これまでの実践を基に、「弥生カリキュラム」の工夫改善を図り、教育活動の質の向上に向けて、全教職員の協働体制によるカリキュラム・マネジメントの充実・強化を図る必要がある。
- 人的・物的資源の確保や学校評価と関連付けた取組など、学校運営協議会や地域との連携・協働を強化する必要がある。

『育む力の明確化と共有化を通じた学校力向上の取組』 ～資質・能力を基盤に据えたカリキュラム・マネジメントの充実～ 上富良野町立東中小学校 学級数7 (校長 澤田 克之)

I はじめに

本校では、令和2年度から資質・能力を基盤とした学校運営のグランドデザインを家庭や地域と共有することで、教育活動に対する共通理解を図っている。家庭、地域と一体となった「チーム学校」としての実効性ある取組を推進するとともに、育成を目指す資質・能力を身に付けることができるよう実践の成果と課題を検証しながら学校力の向上に努めている。

II 実践の概要

1 育みたい資質・能力と教育活動との関連付け

(1) 主体的な分掌運営を通し資質・能力を育む

グランドデザインには年度の重点目標とともに、育てたい5つの資質・能力を示しており、各校務分掌が担当する教育活動について起案する際には、教育活動のねらいと資質・能力の関連を明記している。教職員は目的を共有しながら教育活動に当たるとともに、資質・能力ベースで成果と課題を検証するなど、短期型のPDCAサイクルを確立し、指導に対する効果の検証・改善を日常的に行っている。

(2) 「カリキュラム係」による教育課程の検証・改善

本校では、教務部の中に「カリキュラム係」を配置し、カリキュラム・マネジメントの推進に努めている。

育成を目指す資質・能力の実現に向けて「東中学習（総合的な学習の時間）」と各教科等の関連が図られるよう、研究部・各学年と連携し、「総合的な学習の時間の題材」と「特別活動（行事）」、「教科」、「道徳」の関連を線で結び、視覚化するなど、指導計画の工夫・改善を図ったり、総合的な学習の時間や教科等横断的な学習に係る人的・物的資源に関する情報提供を行ったりしている。

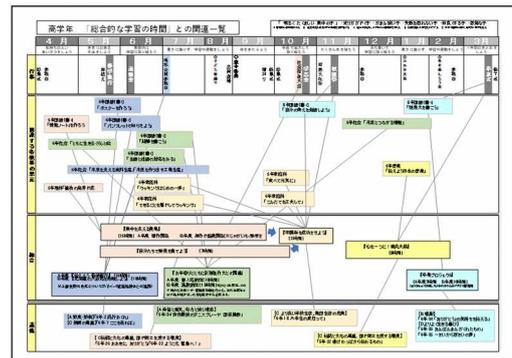
4. 資質・能力の育成を具現化する「主体的な分掌運営」

各分掌や係は、資質・能力と関連させながら運営の重点を設定してきた。令和4年度も、下記の関連を参考に、資質・能力育成につながる主体的な運営、及び、各行事の提案をお願いします。

育てたい資質・能力との関連	言語	文化	芸術	ICT	体育	音楽	家庭	総合	その他
A1 身の周りの環境を鑑み、暮らしに即して意欲的に取り組む姿勢	○	◎	○	○	○	○	○	○	◎
A2 自ら考えて課題に取り組む意欲、意欲を立派にする姿勢	◎	○	○	○	○	○	○	○	◎
B1 様々な場面を想定し、自分の役割を明確に果たす姿勢	○	○	○	○	○	○	○	○	○
B2 身の周りの環境を鑑み、意欲を持って意欲的に取り組む姿勢	○	◎	○	○	○	○	○	○	◎
C1 いつでもどこでも自分から声をかけようとする姿勢	○	○	○	○	○	○	○	○	○
C2 思いやりを表現しあう姿勢、意欲的な姿勢	○	○	○	○	○	○	○	○	○

1. ねらい
①課題を自分ごととしてとらえ、主体的に取り組もうとする態度を育む。A-①
②対話を通して自分達で意思決定し、学校生活を創造する力や行動する力を育む。B-③、D-⑦
③異学年集団の中で協力して活動する態度を育む。C-⑥

【育てたい資質・能力と校務分掌との関連】



【総合的な学習の時間と各教科等との関連一覧】

2 教科等横断的な視点に立った授業改善～校内研修を通じた授業観の共有～

本校では、研究仮説を「教科等横断的な学習において、言語活動の工夫をすることにより、言語能力を高め、自ら考え、伝え合い、学び合う子どもを育てることができるだろう」と設定し、国語科を窓口に、児童の実態を踏まえた上で、授業観を共有し、効果的な指導方法について、議論・実践・検証している。

育てたい資質・能力（授業の目的）を明記する。

本単元では、本校で育てたい資質・能力①②「根拠を基に意思決定し、自分なりの考えや表現を創り出す姿」とD⑦「対話を通じ、相違点や共通点、解決策などを見つけ出す姿」を目指すために、学習リーダーが中心となり、「思考ツール」や「アイコン」を活用しながら、「生き物ブック」を作成する学習を展開していく。また、単元の最後に「2年生に『生き物ブック』を発表しよう」という目的意識をもつことで、意欲を高めながら学習に取り組むことができると考える。

①教科横断的な学習
理科「生き物を調べよう」では、春に見られる植物・動物・昆虫等を観察し、その特徴や気がついたこと等を観察カードにまとめる学習を行った。

②教科横断的な学習
理科「季節と生き物」では、春に見られる植物・動物・昆虫等の写真を撮影し、その説明や感想を観察カードにまとめる学習を行った。本単元では、その後の学習を位置付ける。

手立ての一つとして、教科横断的な学習を位置付ける。
「生き物ブック」を作成する学習へと発展させていく。 | させていく。

【第3・4学年指導案（複式）における指導観（一部抜粋）】

III 成果（○）と課題（●）

- 全ての教育活動を資質・能力ベースで捉え、目的が明確になったことにより、教職員が主体的に手立てを考えるなど、教職員の資質能力の向上につながっている。
- 教科等横断的な学習を意識することで、児童は、他教科での学びを生かして、目的に応じた国語科のまとめを行うなど、教科等間の関連を図った学習を行うことができた。
- 「地域学習」については、今後も持続可能なカリキュラムになるよう、随時見直していく必要がある。
- 組織的なカリキュラム・マネジメントを一層推進するために、教職員個々が行うカリキュラム・マネジメントを推進させる手立てや教職員の更なる意識改革が必要である。

よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成

別海町立上西春別中学校 学級数6 (校長 根本 渉)

I 実践の概要

本校では、各教科等の学習で身に付けた資質・能力を相互に関連付け、学習や生活において生かし、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するため、学校の教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間の目標を明確にするとともに、各教科等の関連を整理した指導計画を作成し、取組を推進した。

II 実践の内容

1 各教科等の関連を整理した単元配列表の作成

学校の教育目標を踏まえ、教育活動全体を見通して、それらが相互に関連することを明確にするため、単元配列表を作成した。作成に当たっては、総合的な学習の時間を中核として、各教科等との相互の関連を可視化することにより、それぞれの教科等の役割や関連を明確にするように留意した。

乳和食	17	日本の国土形態や気候帯の多様性を踏まえ、多岐にわたる食文化の「食の文化」(食の文化の発展)	2	水墨画	1	バレーボール スケート	6	【3年理科、技術】 【4-1 自ら取り組むことによる生活の実践と課題】 【1 地域の食料と郷土料理】 【3年総合「進路」 「別海町」】	3
		海外の食文化や食生活の多様性を踏まえ、その魅力を味わう	2	水墨画	2	バレーボール	6		6
		世界の食文化の音楽	2						
		仲間とともに、表情豊かに活動しよう	3						
		心通う合唱	3						

【教科等横断的な視点で関連付けた単元配列表 (一部抜粋)】

2 「別海PRプロジェクト『べつかい牛乳和食』」

(1) 取組の概要

第2学年では、「別海PRプロジェクト『べつかい牛乳和食』」として、総合的な学習の時間を中核とし、家庭科等の学習を関連付けるとともに、栄養士や酪農関係者等の活用による人的・物的な体制を整備した。本実践は、食と健康等の課題を解決することねらいとし、生徒が、別海町の酪農や牛乳のよさについて理解を深めるとともに、従事する方々の思いを受け止めながら、関係者、地域住民に対して、生徒が考案した乳和食を提案する取組を行った。



【栄養士による乳和食の説明】

(2) 取組の実際

生徒は、学習した地域の特産物の特徴、生産・製造、普及に関わる人々の思いを踏まえ、栄養や食べやすさ等の観点から、特産品を用いたオリジナル乳和食を考案した。また、関係者や地域住民に、考案した乳和食や別海町のPRを行ったことにより、生徒は、地域活性化や食と健康等の課題解決を目指して、自分の考えを深めることができた。



【参加した方々に別海町のPRを行う様子】

III 成果 (○) と課題 (●)

- 学校の教育目標を踏まえ、各教科等の関連を整理した教科等横断的な指導計画を作成するとともに、関係者や地域住民の活用による人的又は物的な体制を整備したことにより、地域活性化や食と健康等の課題解決を図るなど、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成につなげることができた。
- 地域の課題を解決するなど持続可能な社会の創り手を育成するため、小・中学校の9年間を見通して、育成する資質・能力や指導計画の見直し・改善を図る必要がある。